

サハラ

「砂漠」なのか或いは「沙漠」なのか。一般的には「砂漠」が使用されているようですがサハラでも砂地の部分は全体の二割程度だと言われておりその他は土、礫、岩で構成されていることを思えば小堀巖氏が云われるようにそのものズバリ水が少ないことを示す漢字「沙」を使った「沙漠」が実態を言い表した表記だと判断します。手元にある「世界の沙漠」(Deserts of the World)によると世界には結構多くの沙漠があるのに驚きます。有名な所ではサハラ、ゴビ、アタカマ等が思いだされます。サハラは世界一の面積で略アメリカ合衆国に匹敵し、アフリカ大陸のアルジェリアを筆頭にモーリタニア、西サハラ、モロッコ、チュニジア、リビア、エジプト、スーダン、チャド、ニジェール、マリの国土で構成されております。サハラとは語源的にはアラビア語の形容詞 Ashar の女性系 Sahra で「赤褐色」と言う意味だそうです。

サハラとのお付き合いはアルジェ駐在の1983年に始まりました。家内と最初の国内旅行はベシャル(Bechar)から南に90km程度離れたオアシスの街、タギット(Taghit)で、目当ては勿論素晴らしい砂丘と砂の海(Ergと言われます)でした。鋼管販売専任であった関係で他部門の駐在員とは異なり国営製鉄所SNS(当時新日鐵が技術援助を実施)のある東のアンナバ(Annaba)以外は専らサハラ出張が主体でした。当時、炭化水素公社Sonatrachは中間者排除政策で商社の活躍の場は限られ、サハラに点在する水井戸開発会社向けステンレス鋼管、フィルター付きステンレス鋼管の拡販の為、メーカーさんを伴いラグアット(Laghouat)、ジェルファ(Djelfa)、トゥグルト(Touggourt)等に出張したものです。一度はアルジェから飛行機で2時間の(パリと略同じ飛行時間)Blue menことトゥアレグ(Touareg)人の街タマンラセット(Tamanrasset)に一人で出張したことも今となれば懐かしい思い出です。

車での出張の場合はアルジェリア商売の知恵袋的存在であった盟友、故Sengadに運転手Tounciを伴い出張したものです。松茸の産地として有名なシュレア(Cherea)近くのブリダ(Blida)を抜け、山越え途中の「猿の谷川」(Ruisseau des singes)で一服しメデア(Medea)を下りクサル・エル・ブハリ(Ksar El Boukhari)辺りに来るとサハラの入り口と言った感じの風景でした。一度はサハラへの出張の帰路ベルアギア(Berrouaghia)の山中で対向車をよけ損ね道路わきの樹に激突する交通事故に会い、激突の瞬間迄は覚えていますが以降は気を失い近くの病院で意識が戻ったようです。同行の二人に話を聞くと後部座席でうとうとしていた当方は後部窓を突き抜け道路に投げ出された由でした。助手席のSengadも日頃は装着しないシートベルトをしていたので助かりました。当日夜は日本人会で嚙家を招待しての寄席が模様される予定でしたがタクシーで深夜に帰宅し擦り傷程度の怪我で家内を驚かせたものです。当時のアルジェリアは未だ社会主義が色濃く閉鎖的な社会であ

り外資は主としてソ連、東欧諸国が主体でブルガリアの Bulgargeomin の駐在員と言った外国人と付き合いをしたりしておりました。

5年駐在の後、帰国しその後、ミラノ駐在となりましたがこの間もサハラとの縁は切れずガルダイア (Ghardaia) のスパイラル鋼管工場 Anabib に納めた鋼板のクレーム処理の為、メーカーの技術者に現地同行し忙しい日々を送りました。街の高台にある Hotel Rostemides に宿泊し、日中は検査立会、夕方には検査結果を郵便局に持ち込み当時やっと使用が始まったファックスでアルジェ事務所に連絡するのが日課でした。思えば当時アルジェ事務所のファックスは無許可で設置していたものだと思います。このスパイラル鋼管工場の従業員の多くは嘗てサハラ交易を支え商売人として名高いムザブ (M'Zab) であり交渉は厳しかったですが所長の招待でナツメ椰子の林の中でミント茶等振舞われ歓談の機会もありオアシスの生活の一部を垣間観ることもでき貴重な経験になりました。

その後は学生時代に過ごしたメキシコとオイルマネーに沸くアゼルバイジャンのバクーに駐在し、2000年古巣のアルジェ事務所のパリ疎開事務所に移駐し、アルジェリアの治安状況の改善に伴い2001年に二度目のアルジェリア駐在となり、最終的に2012年迄11年の長期駐在となりました。アルジェリアもアゼルバイジャンと同様、外資に炭化水素部門の探鉱、開発の門戸を開きシェラトンホテル、街中でも欧米人で大いに賑わい嘗ての閉鎖的で物資不足が頻発する80年代とは隔世の感のする開けた社会に変貌を遂げておりました。

アルジェリアでは1946年に「アルジェリア石油探査国营会社」設立されおり、1956年にはハシ・メサウド (Hassi Messaoud) で石油が発見され1971年には炭化水素は国营化されております。嘗てのサハラ交易とナツメ椰子主体の経済は地下に眠る膨大な炭化水素資源に移行し、多くの外資が進出し活況を呈し、これに伴い出張先は顧客の居るサハラ主体となり二度目の11年間は略毎月最低一度はハシ・メサウドに一泊二日出張しておりました。従い単純計算ですが延べ200日程度はサハラに居たこととなります。極東日本の商社員が西の「地の果て」のアルジェリアのサハラで彼らの言葉を喋り商談するとスペイン、イタリアの連中からは大いに喜ばれこれが商売拡大の助けになったことは確信しております。

アルジェリア最大油田ハシ・メサウドを最初の駐在の際は「豊かな井戸」とのフランス出版の Guide Blue に記載を鵜呑みにしておりましたが実際は現在も街中に在る「メサウドの水井戸」が正に、ハシ・メサウドの名称に因むことを後日知った次第です。一方、最大のガス田であるハシ・ルメル (Hassi R'Mel) を一部の駐在員はロンメル将軍に因んだ名称だと主張しハシ・ロンメルと言っていました。これは「砂の井戸」が正しいようです。いず

れにせよこれら生産地以外の現場にも開発会社の専用機で出かけサハラの魅力を満喫する機会も多々ありました。主要出張先であったハシ・メサウド（飛行機で約50分）では空港近の Red Med と街中の Camp Hotel を定宿としておりましたが食事が美味しくアットホームな Camp Hotel が大好きでした。

サハラでの旅は全て自然相手でアルジェからの飛行機が砂嵐、悪天候等で飛来しないと文明地には帰還できず現地滞在を余儀なくされ、更には何時までも帰りの航空券を手に入れることが出来ないような事態もしばしば起こります。斯様な緊急事態に一番有効なことは人間関係であり現地の有力者を知っていると空港の AH（エア・アルジェリア）従業員、官憲との「顔」があるかないかが大げさかもしれませんが生死を分けると言えるでしょう。幸い長年現地に通っていた関係である程度「顔」があり大いに助かったものです。

最初の駐在では交通事故に遭遇しましたが二度目の駐在中はサハラで一命を失うのではとの時を経験したことがありました。通常はタクシー運転手モハメッドに事前に電話を入れて出張中の移動をお願いしておりましたがある日、彼が空港に見当たらず止む無く一番弱弱しく見える運転手をお願いしました。その際の宿泊先は空港からも近い Red Med でしたが空港を出て暫くすると何時もの道とは異なり人気のない沙漠の中に入って行くのでいよいよ頸を搔っ切れお陀仏かなと大いに危惧する一方、運転手の気を引くため片言のアラビア語を駆使し（彼はフランス語の会話は略不可でした）ましたがその内に沙漠を抜け見知った Red Med の建物を目にしたときは流石に「助かった」と安堵したのを昨日ように思いだします。当時治安は良くなっていたとは言え、森にキノコ狩りに出かけたロシア人がテロリストに首を切られ犠牲者となった等の報道は頻繁にありました。運転手の説明では面倒くさい警察の検問を避けるのが目的であったようです。

ジョン・スコール著の「青い種族」に非常に素晴らしい文章がありましたので下記引用しておきます。

「アフリカがすべての人に要求する性格がひとつある。忍耐ということである。アフリカにおいては、なにごとも、簡単に、真直に、あるいは、安易に運ぶことはまずない。またどんなことでも、想像どおりにいくということもない。ここで神経衰弱にならずにやって行くためには、忍耐力と寛容を養う必要があり、この忍耐と寛容はそれをつむことによって、どんな微細な行動、条件、言葉、約束、人間をも評価できる第六感が出来てくるのである。」

延べ16年の長きにわたりアルジェリアで生活してきた人間として現地で正に実感した印象です。同じことを伊藤忠駐在員の間では「アルジェリア5Aの座右の銘」と言っておりました。要は「慌てず、焦らず、諦めず、当てにせず、されど侮らず」です。流石に先人は素晴らしい知恵を残してくれたものです。

斯様にサハラとのお付き合いも長いので関連蔵書も結構ありますが興味深いものを皆様のご参考まで下記しておきます。一部は写真を添付しておきますのでご参照ください。



1. 砂漠関連

- * Deserts of the World、Susanne Mack, Anthony Ham, Könemann, 2019
515頁に及ぶ世界の沙漠写真集で沙漠愛好家必携（写真添付）。
- * ライフ大自然シリーズ17「砂漠」、スターカー・レオボルド著、1970
砂漠とは？を知る格好の書籍。
- * 「アラビアの旅から 沙漠にて」小堀巖著、未来社、1984
日本に於ける沙漠研究の一人者の著作でサハラのフォガラにも詳しい。
- * Le Livre des Déserts – Itinéraire Scientifiques, Littéraire et Spirituels,
Bruno Doucey 監修、Bouquins, 2006（写真添付）
フランス人好みの科学的、文学的、精神的面から沙漠を描いた百科事典的な書籍。
サハラの記載が多い。

2. サハラ関連

- * 「野町和嘉写真集 サハラ悠遠」、岩波書店、1983 (写真添付)
- * SAHARA「サハラ20年」、野町和嘉、講談社、1996 (写真添付)
何れも素晴らしいサハラの写真集。手元に置き時々眺めると心が休まります。
- * 未踏の大自然「サハラ」、タイム ライフ ブックス、1976
詳しい記述と豊富な写真でサハラの全体像を伝える名著。
- * Mythes et Réalités d'un Désert convoité Le Sahara, Jean Bisson, L'Harmattan, 2003 (写真添付)
フランス人大家によるサハラの過去から現在までの変遷を纏めた大書で「素晴らしい」の一言。
- * The Sahara – A Cultural History, Eamonn Gearon 著、Oxford University Press, 2011 (写真添付)
題名の如くサハラの文化的事項一切を網羅、紹介する書籍で色々な事項を知ることが出来る良書。
- * 「青い種族」、ジョン・スコール著、新潮社版、1958
所謂古書ですが内容の極めて濃い書籍であり古さを感じさせない名著。
- * 「サハラ砂漠の謎」、チーノ・ボッカツィ著、大陸書房、1978
イタリア人探検家によるテネレ、ニジェールに関する書籍。
- * 「私のニジェール探検行 マンゴ・パークの足跡をたどって」、森本哲郎著、中公新書667, 1982
当方の大好きな森本哲郎の著作で読み応えのある書籍。
- * 「トゥアレグ自由への帰路」、デコート豊橋アリサ著、イースト・プレス、2022
日系フランス人女性の塩キャラバン同行記録等。ガッツを感じる力作。
- * Sahara, Michael Palin 著、BBC (写真添付)
2001年BBCが現地取材したサハラの旅を写真と文章で紹介するものでサハラ諸国の姿を捕らえるための絶好の書籍。
- * Una Mirada al Sáhara Occidental, Enrique Gómez 著, 2022
西サハラの過去から現在までをコンパクトに綴ったもので情報不足を十分補ってくれる著作。
- * Sahara La Provincia Olvidada, Miguel del Rey, Carlos Canales 著、edaf, 2018 (写真添付)
スペイン語書名の日本語訳は「サハラ 忘れられた県」である西サハラの過去の歴史を紹介する書籍で興味深い。因みにアルジェリアでは国語ではないが未だにフランス語がつかわれるように西サハラではスペイン語話者が多く居ります。

アフリカでは他に赤道ギニアが過去の歴史を反映してスペイン語がポルトガル語、フランス語と並んで国語となっております。

3. タッシリ・ナジェール岸壁画関連

* 「サハラ、砂漠の画廊 タッシリ・ナジェール古代岸壁画」、野町和嘉著、新潮社、2010 (写真添付)

16年も駐在しておきながら訪れる機会を失い個人的に未だに心残りのある現地の写真集。

* 「タッシリ遺跡 サハラ砂漠の秘境」、H.ロート著、毎日新聞社、1960
注釈不要の名著。

* 「サハラ幻想行 哲学の回廊」、森本哲郎著、河出書房新社、1971
アルジェリア好き人間が一度は目を通した古書。

* 「タッシリ・ナジェール 遺跡との対話」、森本哲郎著、平凡社カラー新書 31、1973

著者が洒落な文章と写真で楽しませてくれる。

4. サハラ交流、交易関連

* 「サハラが南北交流」、私市正年著、世界史リブレット 60, 山川出版社、2004

サハラ交流、交易に関する入門書。

* The Golden Trade of the Moors, Edward William Bovill 著、Princeton, 2009
(写真添付)

初版は1958年 Oxford University Press 発行ですが私市先生の著作より深く
知りたい方にはお勧めです。

(2023年8月22日)